# 戦国大名　黒田氏の時代

## 戦国大名　黒田氏の時代

慶長５年（1600）、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、恩賞として筑前国を黒田長政に与えます。長政は新たに「福岡」という城下町を形成して、福岡藩の初代藩主となり、秋月には孝高（官兵衛）の弟の黒田直之が１万2000石を与えられて移り住みました。元和９年（1623）、長政の遺言により２代藩主忠之は、弟長興に秋月周辺の５万石を分け与えて支藩秋月藩が誕生します。

## 秋月藩初代藩主　黒田長興

▲黒田長興画像（古心寺蔵）

### ○秋月５万石の分知

福岡藩を興した黒田長政はその死に際して、三男の長興に５万石を分知するよう遺言しました。この遺言に基づき元和９年（1623）８月、福岡藩を継いだ兄・忠之から長興に、秋月で５万石の分知目録および２人の付家老と47人の付属する家臣（御付衆）の名簿が渡され、ここに長興を藩主とする秋月藩が誕生しました。長興が14歳のときでした。長興は慶長15年（1610）生まれで、母・永子は徳川家康の養女（親戚の保科正直の娘）です。幼名を犬万といいましたが、少年期から聡明で、父の長政は何かと不行跡の多い長男・忠之よりも三男・長興に世継ぎの期待をかけていたともいわれています。長興は13歳のとき、祖父・孝高（官兵衛）の名をもらって勘解由孝政を名乗り、23歳で長興と改めました。長興は寛永元年（1624）７月に秋月に入り、梅園（現在の秋月中学校）にあった古い屋敷に普請を加えて居城（御館）としました。城下町の縄張り（都市設計）が行われ、武家屋敷や町家の建築が進みました。当時の槌音高い秋月町の賑わいが想像されます。

### ○秋月藩創立の苦労

長興が大名として認められ秋月藩が公認されるためには、江戸に出て将軍に拝謁し、所領安堵の御朱印を拝領することが必要です。そのため秋月では家老の堀平右衛門たちが長興の江戸参府を計画しました。ところが、福岡本藩から長興の江戸参府を禁止する命令が届きます。これは兄・忠之が弟・長興を家来として処遇し、秋月の５万石は福岡藩領内の一部であると解釈するもので、秋月側としては承服できないことでした。長興は、この命令を拒否して江戸参府を強行しました。福岡藩の監視の目をかすめて、僅か10数人の供回りで密かに秋月を出立し、夜陰に小さな漁師船で関門海峡を渡るなどの苦労を重ねて江戸に到着しました。寛永３年（1626）正月に、長興は３代将軍・徳川家光と前将軍・秀忠への拝謁が許され、同年８月には朝廷から甲斐守に叙任されて正式に大名に列座することができました。このあと長興は、江戸に滞在して将軍上洛のお供をしたり江戸城警備や幕府普請の手伝いなどをして将軍家への忠勤に励み、ようやく寛永11年（1634）に秋月領５万石の朱印状を賜ることができました。孝政から長興と改名したのもこのころで、黒田長政血縁の新しい藩を立派に興そうとする決意がくみとれます。

▲寛永13年（1636）以降の秋月藩領域図

### ○藩政の基礎固め

このころ国元の秋月では、城下町の建設が進み、併せて新しい家来の雇い入れが行われ、藩の行政組織や藩士の役割編制がなされました。ちなみに長興時代の家臣の数は（詳細にはわからないものの）、馬廻・無足・組外等の上士身分の者が100人、徒士・郡方・目付等の下士身分の者が150人、足軽身分の者が300人くらいであったと考えられます。このような藩の仕組みを整える過程で、その仕事の中心にあったのが上席家老の堀平右衛門（知行5000石）ですが、次第に彼の独断専横が目立つようになり、家臣の中に不満の声が出てきました。このことで藩主・長興から厳しく叱責された堀平右衛門は秋月藩を退去してしまいました。同時に堀一派の10数人も集団で脱藩し、藩内に大きな動揺が起こりました。しかし、長興は19歳の若年ながら沈着冷静に対処してこの混乱を見事に収拾し、家臣領民の信望を集め藩政の基礎を固めていきました。

### ○島原の乱に出陣

寛永14年（1637）10月、島原の乱が起こりました。天草四郎を総大将に奉じた一揆３万人余が島原半島の原城に立て籠もって、領主の過酷な重税とキリシタン弾圧に抵抗して反乱を起こしたのです。この乱の鎮圧に幕府は、九州の諸大名に号令して12万人もの大軍を動員しました。寛永15年（1638）１月、幕府の命令を受けた黒田長興は、約2000人の兵を率いて島原に出陣しました。同年２月末の原城総攻撃のときに秋月勢は奮戦しましたが、このときの長興の泰然とした大将ぶりと的確な采配は、家臣たちに勇気と安心を与えました。この乱は激しい戦闘の末に鎮圧されましたが、秋月勢は戦死者35人と負傷者345人を出しました。秋月に帰陣後、戦死者の葬儀を盛大に執り行い、遺族や負傷者への見舞いを懇篤にしました。また、各人の働きに応じた褒賞が適切公平であったので藩主・長興に対する家臣たちの敬愛は絶対的なものになりました。

### ○長興の領内統治

秋月藩５万石の所領は、夜須、下座、嘉麻の３郡内の55カ村ですが、山間地が多く含まれていて農業生産力が低く、また、商業の盛んな甘木町は秋月領から外されていたので、藩の財政は当初から多くの困難を抱えていました。しかし、長興が家老などに与えた文書には、「百姓ヲ憐ミ」や「百姓ニ痛カラザルヨウニ」などの文言があり、藩財政を支える農民に対して無理な年貢や労役を課さないように戒めています。長興時代の事業で主なものとしては、原地蔵（筑前町）の新田開発や、小石原川と野鳥川が合流する女男石の護岸工事等があります。また、山間地を家臣に分け与えて植林育成させることも行いました。新八丁峠道を開削したり、野町（筑前町）に宿駅を創設したりするなど秋月街道の整備にも努めています。長興の日々の暮らしは、質素倹約を率先すると共に武芸や学問に励んだと伝えられています。秋月藩の質実剛健で尚武の気風は、初代藩主・長興のときから始まったと言えましょう。長興は、父・長政の菩提寺として古心寺（朝倉市秋月）を、母の菩提寺として大凉寺（朝倉市秋月）を建立するなど数々の業績を残し、寛文５年（1665）３月、江戸の藩邸で亡くなりました。享年56歳、藩主在位42年でした。遺髪が秋月の古心寺に葬られ、また、死後200年経った安政６年（1859）に垂裕明神の神号を贈られて、今も垂裕神社に祭られています。

▲古心寺にある長興の墓

## 秋月藩中興の祖　黒田長舒

### ○８代藩主長舒誕生

黒田長舒は、明和２年（1765）日向高鍋藩７代藩主種茂の二男（幸三郎）として生まれましたが、天明５年（1785）21歳のとき、秋月藩８代藩主として迎えられました。長舒は叔父の上杉鷹山をはじめ、先祖に上杉謙信・秋月種実・黒田如水・吉良上野介・妻方に山内一豊等多彩な血筋を持ち後に秋月藩中興の祖と讃えられました。時まさに徳川11代将軍家斉の治世、老中松平定信の寛政の改革、その後の文化・文政の江戸文化が花咲く前の頃でした。秋月藩は、天明４年（1784）７代藩主黒田長堅が嗣子がないまま、18歳で若死にし、断絶の危機を迎えました。秋月藩のこの事態に、福岡藩は秋月藩廃絶を画策しましたが、家老渡辺典膳などの努力で藩取り潰しの危機は免れました。この時、長舒は、父の高鍋藩主秋月種茂の母（春姫）が秋月藩４代藩主黒田長貞の娘という黒田家・秋月家双方の血をひき、若い頃から文武に秀で、その資質を高く評価されていたので、まさに秋月藩が跡継ぎとして渇望した人物でした。藩主となった長舒は家老渡辺典膳などが建白した「国計大則」によって蓄えられた備蓄金を活用し、若さと英知を駆使してさまざまな業績を残していきました。

### ○長舒の善政

長舒は、叔父上杉鷹山を畏敬し、鷹山を範として諸般の振興を図り、藩主として領民への慈しみの心を終生持ち続け、『経世済民』を実践しました。この頃、全国的に危機的な年貢の減少と農民の労働力が不足していたので、その増大を図るとともに人命尊重という人道上からも、長舒は子の間引きを禁止し、妊婦は庄屋に届けさせ、子育ての困難な家庭には養育米を与えました。更に領内を巡回し、領民に声をかけ、善行者を表彰し、80歳以上の人を招いて労をねぎらい、酒食をともにして贈物をしました。また、長舒は相撲を好み、力士を競わせたり、別荘で花火を揚げさせたり、八幡神社で歌舞伎芝居を催させたりして、人心を和ませました。領民への慈しみと高齢者へのいたわりの心を藩主自ら実践したのです。